

新給食センターはここに

中学校給食実施のためのセンター、候補地は稲生F 1 マート東の市有地

市議会6月定例会の施政方針で末松則子市長は、中学校給食を「スピード感をもって」取り組むと表明し、補正予算に新しい給食センター設置に向けた調査費（用地の鑑定評価費用）894,000円を計上しました。審議の中で、センターの建設予定地は、稲生4丁目・F1マートに隣接する市有地（土地開発公社）であることが明らかになりました。（地図参照）



「塩漬け」の未利用地を活用

この土地は平成9年に「中勢バイパス代替地」の名目で開発公社が取得しましたが、その後利用されることなく放置されていました。面積は2.2ヘクタール、

取得価格は7億8千万円でしたが、現在の時価は3億円を下回る見通しです。私はこの補正予算への討論で、「開発公社としては5億円もの損失となるが、いつかは解決すべき遊休地の活用を、今回の給食センターという市民のための施設にすることは、大きな意義がある」と賛成を表明しました。

森川議員が給食の開始時期について質問、末松市長は「遅くとも平成27年」と答えましたが、森川議員は「用地もあるのだから、もっと前倒しして3年以内に始める努力を」と求めました。

生活保護不正事件、市長退職金についての見解、川岸さんと変わらず

末松新市長の姿勢を問う一般質問への答弁

6月9日の本会議一般質問で、私は末松市長に、川岸前市長の任期中に起こり、ウヤムヤな「解決」に終わっている「生活保護不正支給事件」についてどう考えているか、特権的な市長退職金について、見直す考えはないか、を尋ねました。

生活保護事件では、鈴鹿市役所の体質として「ズサンで無責任」と外部委員会からきびしく指摘されたのに、前市長は市としての総括をせず、社会福祉事務所の文書で済ませてしまいました。また5800万円の損害についても、うち4000万円を職員共済組合から穴埋めして、「けじめがついた」としました。私は、これでは市役所の「風土」は変わっていかない、事件をしっかりと再検討すること、を求めました。しかし末松市長は、事件に関する文書などは読んだが、川岸さんのやり方で「けじめはついている」との見解に終始しました。

鈴木県知事は早々と「退職金ナシ」にした

川岸さんは「1期4年で1900万円」という特権的な退職金を見直すことなく、受け取って退任しました。私は末松市長に、市民感覚から見ても多すぎる退職金を無くすか、一般職員並みにするように求めました。末松市長はこの件も、川岸さんと同じ「妥当な制度」だとの見解で、「今後の財政状況や特別職報酬審議会の意見を参考に検討」するとのことでした。

しかし特別職報酬審議会の審議の対象は、市長などの「給与額」のみであり、退職金はその対象になっていません。市長がみずから無くそうと決めれば、できるのです。三重県の鈴木英敬知事は就任早々、給与を引き下げ、退職金はやめてしまいました（6月28日議決）。全国的にも、見直す自治体首長が多くなってきています。

私は、特別職・一般職の公務員の報酬が「安ければ安いほどいい」とは考えません。また名古屋の河村市長のようなパフォーマンスにも、賛成できません。しかし、市民の目線から見て特権的だと思われることについては、率先して見直していくことが必要だと思います。

鈴西小・手抜き工事の責任を問う

6月議会に「調停の申立て」の議案が出され、全会一致で議決されました。これは24年前の1987年に鈴西小学校の校舎建設を施工した、杉之内工務店・近藤工務店が、ズサンな工事を行ない、コンクリート柱29本中12本の強度が不足していたことの責任を業者に問うものです。

市は1年かけて柱などの補強工事を行ない、その間、児童や教職員はプレハブで過ごすなどの不便を強いられました。議案は、その工事費や関係費用7520万円を、2業者が支払うことを求めています。業者側は、20年も昔のことで書類もない、関係者も分からないなどで、支払いを拒否しているとのこと。しかし「現場」が残っているのが、何よりの証明です。完成後に出来た欠陥ではなく、工事中に出来たものであることも、第三者機関の調査で明らかです。

建設業を長年続けている老舗の工務店が、過去の仕事で重大な欠陥が判明したのですから、これはプロとしての恥だ、何を置いても修理に駆けつけるという姿勢が、当たり前ではないでしょうか。20年も昔のことだなどと、責任逃れの言い訳をしているようでは、世間の信用も無くなってしまいます。業者側が素直に調停に応じて、責任を果たすことを求めます。

救援ボランティアに行ってきました



6月3日～7日に宮城県仙南地区へ、森川議員とともに震災救援ボランティアに出かけました。正味3日間でしたが、亘理町のイチゴ農家の泥出し（写真）、名取市のカーネーション農家でも泥出し、枯れた花の片付けなどを手伝いました。

津波をかぶった地域は、すべて分厚い泥に覆われていて、宅地や道路は片付いていても、農地は手付かずのままです。ハウスの1棟ごとに泥を剥がしていく手間も大変ですが、私たちが行くことで、現地の人たちも元気・やる気になります。

これからも長期の支援体制が組まれます。皆さんもぜひボランティアに参加してください。申し込み・問い合わせは、共産党の事務所まで。



寡黙な健さん、大いに語る

中国人の映画評論家・劉文兵氏が、中国でも人気のある、日本のトップクラスの映画人にインタビューしたものをまとめた「証言・日中映画人交流」（集英社新書）。登場するのは、俳優では高倉健、栗原小巻、監督では山田洋次、佐藤純弥。故木下恵介は関係者3人のインタビューで構成している。

中でも、高倉健は、映画の中でも無口な印象の強い人であるが、その健さんから生い立ちや時代ごとの映画への思いをしっかりと語らせている。へえー、健さんはこんな人だったのか、まじめで教養の深い人なんだなと分かった。

以下は、各人のことばから、いいなと思った所の抜書き。

人の心を打つのは、大声でも、難しい字でもない

高倉健 「人の心を打つっていうのは、大声で言うことでもないし、いっぱい書くことでもないし、難しい字でもないし、ちょっと何か分からないけれど、ほんのちょっとしたことの何かがあるんじゃないですかね。」

栗原小巻 「政治や経済は、時代や状況によってゆれ動くことがあります。文化の力は、ゆるぎません。人間が本来持っている、善なるものへの信頼、それが文化であり、文化交流です。」

佐藤純弥 「映画俳優には二種類あると思います。一つは、役になりきってしまって自分を消せる人。もう一つは、逆に自分の上に役を重ねる人。」
「高倉健は、やはり自分の魅力と役の魅力というのがイコールになっていると思う。」
「逆に出演するたびに違った顔をするのは、それも僕はすごいなあと思います。日本の俳優でそこまでやったり、考える方は三國連太郎だと思います。」

山田洋次 「映画はきわめて資本主義的な芸術なんだ。観客を感動させたいという芸術的欲求と、お金を儲けたいという、きわめて資本主義的なビジネスでもある。ビジネスと芸術というのは本来一緒にならないはずなのに、映画の場合はくっついて離れるわけにいかない。」

「高倉健さんという人は、撮影が始まると朝ご飯食べない。」
「健さんの目はお腹空いてる目なんだね。飢えている目なんだ。健さんはそういう人なんです。お腹空いた状態で芝居、演技しているの。」